

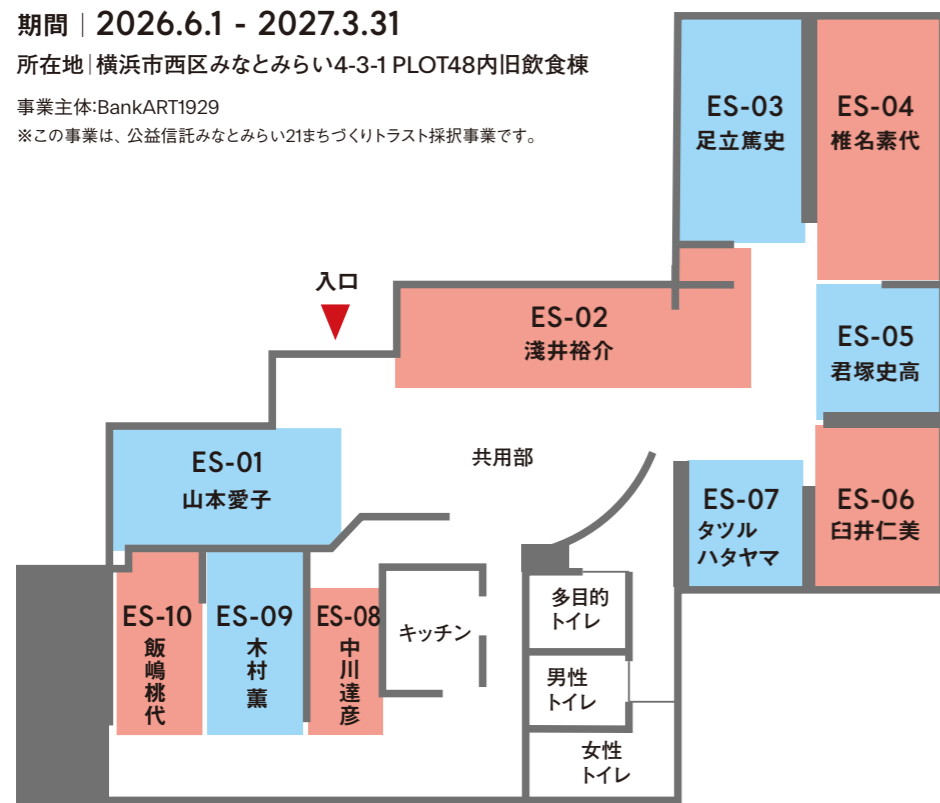
# ExPLOT Studio 2026

期間 | 2026.6.1 - 2027.3.31

所在地 | 横浜市西区みなとみらい4-3-1 PLOT48旧飲食棟

事業主体:BankART1929

※この事業は、公益信託みなとみらい21まちづくりトラスト採択事業です。



## ES-05

君塚史高

Fumitaka KIMIZUKA

スタジオが旧飲食棟ということで、食に関する作品を作りたいと考えています。現時点で一番作りたいと思っているのは、「自動的に回転する茶碗」です。出されたお茶を飲む前に時計回りにまわす所作を自動化することを目的としています。近い将来、AIが人間の文化を学習した結果、このようなプロダクトが現れる気がするので、AIより先に作っておきたいです。あと、中華料理屋の回転円卓を使ってDJをするという野望もあります。料理皿を使ったディスクジョッキーを目指したいです。

きみづか・ふみたか | 1983年生まれ。横浜市在住。プログラマー。情報科学芸術大学院大学メディア表現研究科修了後、「流れる景色がアクションゲームに見える車窓」「光と音で炒飯の登場を盛り上げるフタ」「暗闇で光るマキシシ」「人間に時間を尋ねてくるスマートスピーカー」「回すと歓喜の歌が流れる換気扇」「コントローラーで走らせることができるマウス」「帰ってきた寿司の色に応じて音を奏でるシーケンサー」などを制作している。



## ES-06

臼井仁美

Hitomi USUI

ExPLOT Studioへの入居によって、制作がひとりの時間の中ではなく、人や社会の中にあるものとなること、自身の感情に生じる変化や客観的な視点に意識を向けながら活動したいと考えています。「木器時代」の想像を手がかりに、人間の自然への眼差しや、民俗文化への関心をもとにリサーチと制作を行います。私たちの身体、生活と世界からの要素の収集、木製品とその持ち主の方との記憶を辿るプロジェクトの継続、大型の曲木作品の制作を計画しています。

うすい・ひとみ | 東京都出身。2010年東京藝術大学大学院美術研究科修了。主な展覧会に、「Hiroshima MoCA FIVE 25/26」(広島市現代美術館、2025-2026)、「NEW New Artists / NEW Backbone Artists 2025」(Art Center NEW、2025)、個展「やまは蔵、まちの原木、ケズリカケの木々」(秋田市文化創造館、2023)など。滞在制作実績として、HIAP-Helsinki International Artist Programme (2017, 2018)、NordicArtists'Centre in Dale(2025)などがある。



Someone's brush, Someone's garden, 2025

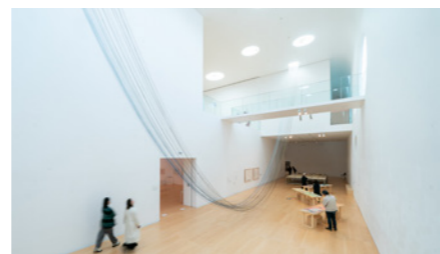
## ES-01

山本愛子

Aiko YAMAMOTO

子供の頃、この周辺はビルと荒地がほどよく入り混じる場所という印象でした。都市化の進んだ現在の街を歩いていると、賑わいを楽しむ自分と、荒地の風景を想う自分とが摩擦することがあります。そのような場所に制作拠点を構えられることは、自然と人工の関係性や土地の記憶についての思考を深める大切な機会であると感じています。今年度はヨコハマポートサイド地区でのアートプロジェクトも進行中です。移り変わる都市をよく歩き、自然現象をよく観察し、制作に励みたいと思います。

やまもと・あいこ | 1991年神奈川県横浜市生まれ。東京藝術大学大学院先端芸術表現科修了(2017)。ポーラ美術振興財団在外研修員として中国にて研修(2019)。アジアを中心とした国内外でのフィールドリサーチを通じて、自然環境と人間の関係性をテーマに、主に染色技術を用いて作品を制作している。主な展覧会に「こたえは風に吹かれている」(越後妻有里山現代美術館 MonET / 新潟 2025)、「往古来今 / 見えない泉をさまよいます」(横須賀美術館 / 神奈川 2024)、「BankART Under 35」(BankART KAIKO / 神奈川 2021)などがある。



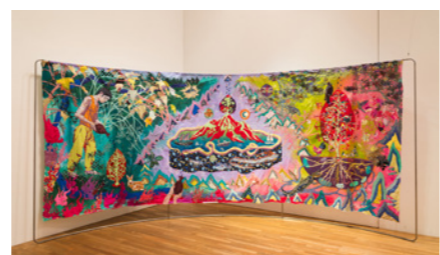
## ES-07

タツルハタヤマ

Tatsuru HATAYAMA

横浜は開港都市として多くの外国船を受け入れてきた。万国旗の由来は港にある外国船の国旗がもとだと考えられている。万国旗は国家間の友好の証であると同時に、植民地や戦争の歴史、グローバリズムとも深く関わっている。スタジオ入居をきっかけに、出身地である横浜の外交の歴史と国旗の関係のリサーチをしたい。また、社会運動のバナーやキルト、レインボーフラッグなど、様々な旗にまつわる個人的な経験をもとにした多様な架空の共同体の旗を制作し、国家ではない個人の連帯のためのオルタナティブな共同体について考察したい。

たつるはたやま | 神奈川県生まれ。東京藝術大学大学院グローバルアートプラクティス専攻卒業。近年は、家族と友人から譲ってもらった布を用いたパッチワークによる平面作品や衣服を制作している。裁縫という手法を、家の中から外の社会へと個人を拡張する行為と捉え、独自の色彩言語で、日常の観察や小さな発見が重なり合う風景を描いている。主な個展に「カラフルなパレード」(Art Center Ongoing(2025年))。受賞歴に「アートアワードトーキョー丸の内2026」(2026)、「第27回岡本太郎現代芸術賞」特別賞。



## ES-02

浅井裕介

Yusuke ASAI

絵はどこから生まれてくるのか？ 人類はなぜ長い長い時間の中で絵を描き、この星の中に何を刻み続けてきたのか？ものを作る目、手、足、体、場所、時間、言葉、とはどんなものだろうか？作り続ける中で見えてくるものを試作する。本スタジオでは主に様々な土地の土や、身近な素材を使っている平面作品の制作と並行し、近年作り始めていた大型の立体作品の制作や、これまで集めてきた膨大な土を使った陶芸作品の制作と実験なども半公開するような形で行い、他入居作家や、友人知人との共同スタジオならではの実践的なコミュニケーションを行っていく。

あさい・ゆうすけ | 絵描き、東京在住。主な個展「浅井裕介展 星屑の子どもたち」(金津創作の森美術館、2024年)、「横浜美術館 新収蔵作品特別展示 浅井裕介「八百万の森へ」」(横浜美術館、2024年)、「浅井裕介-絵の種 土の旅」(箱根彫刻の森美術館、2015-2016年)、など。国内外のアートプロジェクトや展示に多数参加している。2019年、横浜文化賞 文化・芸術奨励賞を受賞。



## ES-08

中川達彦

Tatsuhiko NAKAGAWA

これまで撮り続けてきた作品シリーズをまとめ、個展などで発表することを目指して活動する。このスタジオで新たな人々と出会い、まわりのアーティストたちと切磋琢磨することは、さまざまなことを学び直し、滞っていたことを進めていきたい現在の自分にとって大きな意味を持つ時間となるだろう。また、長年アーカイブとしての写真を撮り続けるなかで「現場に身を置くこと」の重要性を痛感しており、アートを通して人々が集まるExPLOT Studioという現場に、写真家として誠実に向き合い、記録していくことが自分の役割だと考えている。

なかがわ・たつひこ | 写真家。大阪生まれ東京育ち。1986年から美術建築ユニット「PHスタジオ」のメンバーとして様々なアートプロジェクトに携わりと同時にアーティストの作品や展示風景を撮影する写真家としても活動。2010年頃からBankART1929のオフィシャルカメラマンとして数々の記録写真を撮る。作家活動として個展やグループ展の開催、滞在制作として光州市立美術館レジデンスプログラム(韓国/光州、2017)ART SETOUCHI「ライトハウス号が行く〜瀬戸内本島編〜」(香川/本島、2018)などがある。



## ES-03

足立篤史

Atsushi ADACHI

日々更新される社会的出来事や個人の記憶を素材に、断片的なイメージの集積による作品を制作する。記憶や記録を用いたコラージュや立体・平面作品の制作を軸に、他との対話や痕跡、偶発的な出来事を積極的に取り込み、普段の様な単独制作では生まれない関係性や視点の生成を試みる。また、普段の制作環境とは違う場、広さを生かし、大型作品、平面作品などの新たな可能性へ挑戦する場とし、そこで制作した作品により、新たな環境での作品発表などへとチャンスを広げていく。

あだち・あつし | 1988年神奈川県生まれ。2014年東京造形大学美術学科彫刻専攻卒業。主な展示に、個展「記憶-Kioku」(ニューヨーク、2014)、「都美セレクショングループ展「紙神」」(東京、2016)、「BankART U35 "REMEMBER"」(横浜、2022)、「第26回岡本太郎 現代芸術賞」「特別賞」受賞(川崎、2023)、「KAIKA TOKYO AWARD 2024」「山崎潤也賞」受賞(東京、2024)、個展「Memoria - 記憶的形状」(台湾、2026)。



## ES-09

木村薫

Kaoru KIMURA

幼少期に亡くなった母を主題に、残された写真などのメディアと自身の記憶、関係性をもとに制作を行う。絵画と立体を同並列に扱いながら表現を探っていきたい。また、昨年ExPLOT Studioで制作したインタラクティブな雰囲気をもテーマにした作品のブラッシュアップなど、光学的なアプローチを用い、知覚や認識をめぐる現象の作品化も試みている。他者や空間との関わりによって、自身の認識や制作プロセスがどのように変化しうるのかに関心があり、観る人の記憶が立ち上がる過程そのものに触れたいと考えている。

きむら・かおる | 女子美術大学短期大学部造形科絵画専攻卒業。卒業後、都内のデザイン事務所にデザイナーとして従事。2013年にアートNPOゼロデータアーティスト・レジデンスに参加、2014年には同プロジェクトにてプログラムコーディネーターを務める。2019年に「14product」を立ち上げ独立。ヨコハマダンスコレクションのMVなど、多数のデザインワークを手がける。2024年より本格的に作品制作を開始。2025年ExPLOT Studio短期入居。



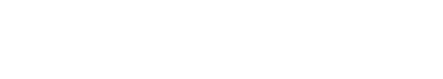
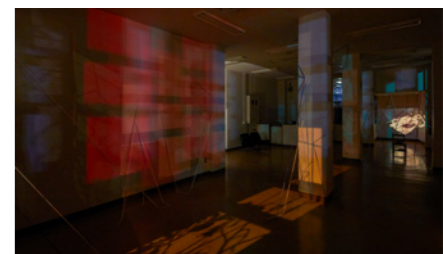
## ES-04

椎名素代

Motoyo SHIINA

マスキングテープを用いて壁面、床、柱を縦横に使ったインスタレーションを制作・記録し、空間を更新していく。また、オープンスタジオを中心に制作過程を公開し、「変化のプロセス」を軸にしたワークショップを通して市民との接点も持ちたい。私は、そこに確かに存在しながら、変化と共に消えていく仮設的な状態や存在のあり方に関心がある。他者の気配や空間の状態が絶えず動いているシェアスタジオを活用し、記録映像を投影した場所に試作を重ね、過去と現在が交差する空間を立ち上げる。

しいな・もとよ | 東京藝術大学大学院美術研究科グローバルアートプラクティス専攻修了、大阪芸術大学芸術学部写真学科卒業。主な展覧会に、「ニューオルタナティブズ | 問いの研究所」(東京藝術大学美術館陳列館/2025)、個展「Hamamatsu/Naumann's elephant/Shadow」(鶴江アートセンター/2023)、個展「Skating Lines」(soco1010/2021)など。Canon写真新世紀準グランプリ受賞(2004)、鶴江アートセンターレジデンス滞在(2022)



## ES-10

飯嶋桃代

Momoyo IJIMA

スタジオでは作品制作とトークを行い、根岸競馬場跡地のリサーチを基に、日本陸軍が競馬を通じて試みた軍馬改良のプロバガンダの展開とその限界、娯楽性が統制を逸脱する両義性を探る。戦争におけるプロバガンダは当時の土産物や玩具にも見出すことができる。制作としては、置物の騎馬像をメリーゴーランド状に再構成した作品や騎馬像型の電動ブッシュ人形の制作を構想している。玩具や置物を用いて、娯楽性がプロバガンダに与える逸脱を表現することを試みる。

いいじま・ももよ | 横浜市生まれ。美術家。身近な日用品をバラフィンワックスに封じ込め、カーヴィングの技法で造形する立体作品を制作している。これらの作品を通して社会と個人、家族と個人といった関係性を問い直している。近年は世界や日本の神話、小さな地域に伝わる民話のリサーチをもとに、「病」や「死」または「戦争」をテーマとした作品にも取り組んでいる。2025年「煙が消えるその前に」横浜市民ギャラリー、2024年「Sphinx - 人間の台座」ギャラリー東京ユモニテなど、個展グループ展多数。

